

第六・七合併号

昭和四十四年五月二十八日發行

# 東大斗争 獄中書簡集

奪われた富の何分の一かを  
奪い返そうとした彼は  
即座に手錠をかけられました。  
「窃盜」  
僕らのことばでいえば  
「奪還未遂」でしょう。

|             |          |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
|-------------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|----------|--|
| 一、五月十五日     | .....    | 東         | 拘        | よ        | り        |          |          |         |          |  |
| 二、五月十二日     | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 三、五月六日      | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 四、四月九日      | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 五、五月二十一日    | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 六、五月二十日     | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 七、五月十六日     | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 八、五月十九日     | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 九、一読者より     | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十、救対通信      | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十一、梅井義広(坂名) | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十二、板谷基明(坂名) | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十三、三角清人(坂名) | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十四、余田仁(立命大) | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十五、奥津久男(坂名) | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十六、小沢哲(坂名)  | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十七、田川秀一(坂名) | .....    |           |          |          |          |          |          |         |          |  |
| 十八、         | 田川秀一(坂名) | 安西まこと(坂名) | 梅井義広(坂名) | 板谷基明(坂名) | 三角清人(坂名) | 余田仁(立命大) | 奥津久男(坂名) | 小沢哲(坂名) | 田川秀一(坂名) | 一<br>二<br>三<br>四<br>五<br>六<br>七<br>八<br>九<br>十<br>十一<br>十二<br>十三<br>十四<br>十五 |

三

次

安西 まこと(仮名)

一、五月十五日

東拘より

安西まこと(仮名)

二月十三日

三  
五  
月  
八  
日

卷之三

六、五月二十日

七、五月十六日

八  
五月十九日

十一、救对通

情宣部

十一

## 五月十五日 束拘より

安西 まこと(仮名)

斗う都市工学科の学友・院生諸君／お元気ですか。

五・一〇破防法紛糾・統一公判要求集会の大成功と果敢なデモの模様、読売新聞の歪められた隅っこの小さな記事を通してではありましたが、拘置所の中まで生々と伝わってきました。

面会・差入ありがとうございました。遅ればせながらお礼を申上げます。

外における斗い、殊に学科における斗いの困難さは僕の想像以上のものでしょ。その困難さは、直接には学内のヘゲモニーを機動隊をうしろに隠した大学当局に再び握られたことからくるのですが、さらに重要なのは、もう一つの面でしょ。東大斗争は、十二月初めを境に重大な質的転換を行なってしまいました。七項目要求、大衆団交要求から東京帝国主義大学解体、全学封鎖へと運動は登りつめ、その質的变化に対応して当然の如くあらわれてきた大学当局、民青、右翼三位一体となつた粉争收拾共同体を解体すべく僕たちが自ら、武装していくた過程は、又当然の事ながら僕たち自身の質的变化がまた為しとげられていく過程でもあつたのです。

今でも、心の片隅から十一月段階でやめておくんだつたとささやく声が聞えないわけではありません。十一月段階において、僕たちは斗い抜く以外に行く所も帰る所もなかつたし、事実十二月・一月の斗争を斗い抜いてきたわけです。斗い抜いたことによつて、僕たちは大きな責任を持つのです。それは階級的

責任といふべきなのでしょう。——このような言葉を使うことをには抵抗を感じますが。

僕たちは(少くとも僕は)非・政治的に斗おうとしてきました。(もちろん主観的にの話ですが)だが、この非・政治的行動も、貫徹されたが故に、政治的行動となつたのです。ノン・ボリであるということは、政治的・階級的責任を免れてあるとということにはならないでしょう。

そういう意味で、十二月、一月を斗い抜いた僕たちの学科斗争は、もはや待遇改善や△民主化▽では集約しきれない斗いに突入したのです。目にみえる弾圧よりも何よりも、僕たちの困難は不斷に自己を斗いに組織していかねばならない。それを永続的にやっていかねばならない、というところにあるのです。

時折、向いの雑居房の住人から「ガクセイ、ガンバレヨオ」と連帯のあいさつが届きます。

昭島署の留置場である窃盗犯氏が次のようなことを言つてました。「あんたたちや、今でこそこうやって俺たちとつきあってくれてるが、娑婆で会つたって声もかけてくれんだろう。」東大法学部の某君は即座に「そんなことはありませんよ」と答えただけど、そんなことなくもないようです。

盗むとは何か。先日の新聞に「松下幸之助氏、今年も長者番は一位」とありました。彼の収入は七億円。このうち、彼の「労働者」としての労働の等価は〇、一%くらいかな。そうすると、九九、九%は盗んだ金ですが、松下さんは今年も逮捕されませんでした。一方窃盗犯の彼は仲間と一五〇万の反物を盗

みました。得ようとした金は一五〇万の何分の一かです。彼は

中学に一年の十学期までしか行けず、との十五年間、労働を

収奪されつづけてきました。奪われた富の何分の一かを奪い返

そうとした彼は、即座に手錠をかけられました。「窃盜」――

僕らのことばでいえば「奪還未遂」でしょう。もっとも、

未遂に終らずまんまと奪還に成功した幸わせなのもいます。

ちなみに昭島署の看守の話によると同署管内の窃盜の検挙率は六割だそうです。

全斗連理論合宿のレジメにあったように都市計画者運動とは

奪われた都市計画の意味を奪い返す斗いで他なりません。

ブルジョアジーは、労働者人民から生産手段を、労働や学問からその意味を奪いました。僕らの斗争はブルジョアジーの手から奪われたものを奪い返すという質において階級斗争の一つの形態です。僕たちが、かの窃盜犯の彼と連帯できるとすれば、奪還を企てるということ、そのことによって、手錠が待っている、という現実においてでしょう。

東京地裁企画・構成による分割公判が近づいてきました。断固出廷拒否あるのみです。分割の法廷と皆さんと顔を合せるハメにならないようがんばるつもりです。では又。  
五月十五日

## 五月十二日 東拘より

工学部の学友諸兄 お元気ですか。  
梅井義弘(仮名)

四・二八斗争に於て、工学部もかなりの検挙者を出したようですね。救対の皆様をはじめ総括作業に、クラス活動に活躍しておられる学友も、彼らの救援活動、それにこの東大斗争、そして七〇年代の尖鋭な階級斗争への一層の斗争主体の強化と大変なことだろうと思います。

留置所では、唯、友人からの差し入れが頼みであり、それ以上に心の支えになるものはありませんので、当面はこちらの方への面会をさいてでも、できるだけ毎日、彼らへの差し入れ活動を行なっていただきたいものと思います。

面会の時の話や「ジャーナル」などを読みますと、東大でかなりの部分が四・二八に決起したようですね。安保・沖縄斗争と東大斗争の結合ということですが、「ジャーナル」などでは「とまどいながら……」とか、「大学の方に氣をひかれながら……」という様ないい方がしてありました。実際はどうだったのですか。いわば公式的に、情勢分析から、あるいは、その「政治的頂点から……」というのではなくして、実体的に自らのものとした理論において、どの様に結合させ、自らの実践の中へ組み入れていったのか……知りたいと思っています。それは、昨年の一〇・一一でも問題になつた如く、東大斗争の中で何を抱え、自らの問題としていたのか……という事だと

思いますが、それのみにとどまらず、中間総括を媒介として、自分たちがこれまで行なってきた運動論や思考の方法論そのものを自ら対象化し、新たに問題を作りあげてゆかなければならぬのではないかと思いませんが、どうですか。

「東大全共斗、四・二八でカイメツか？」とか言われているそうですね。たしかに痛手は痛手として総括しなければならないでしようが、それでもなお、不死鳥の様な全共斗だと僕は信じています。どうかがんばって下さい。

僕たち獄中東拘組も、僕らなりに四・二八を斗い、統一公判めざして強固な体制を創ろうとしています。四・二八には、ほぼ全員（と思う？）が、ハンガーストライキを組み、点検時には自らの番号にかえて、スローガンのシユブレヒコールをおこないました。安保粉碎！沖縄斗争勝利！のスローガンが、各房から叫ばれ、連帯の拍手、『異議ナシ』が、そして、インター

ターが、ほとんど学生のみの東拘の一つの建物をゆきぶりました。驚いた看守たちが、翌日から連絡がつくはずがない各学生の動きを一層注意し、スローガンのシユブレヒコールには、『読書禁止』、『罰室行き』、『テロ』の報復を舍内機動隊の巡回の強化を計ったことはいうまでもありません。しかし、僕たちは粘り強い獄中斗争の展開への自信を一層強めるばかりだったと言えると思います。

しかし、五・九／一〇斗争は、ビラ入りが一〇日午後という様な有様で、おまけに黒くぬりつぶした所もあり、充分徹底しなかった様に思いました。ハンスト貫徹は（残飯あつめの音を

どを頼りに考えると）一割～二割位でしかない様で、残りはほとんど斗争のあることさえ知らなかつた様です。効果の上から考えても連絡は確実につけることを救対に言っておいて下さい。

お願ひします。

近頃はもうほんとに夏の暑さで、房の中もむし暑くて大変なのですが、僕のところは風もよく入り、すごしやすい方なのだと思います。ハンストでぐったりしていると、夜もなかなか眠れず、うす赤い天じょうの電灯などをみつめながら遠い電車の音を聞いたりしているわけです。そんな時、外のみんなが何をしているかなて時々考えます。いつもブツブツ文句を言いながら会議をしていた奴、イライラしながら“方針は何なのさ”といふ男……相かわらず熱心に何かを決めようとしている連中がこの同じ時間に生まれている！と考えることは、やはり僕にとって大きなものとしてあります。

この五月で卒業し、就転する学友もかなりいると思します。何かやりのこしたと思いながら、去ってゆくことはとてもられないことだろうと思いませんが、しかし、同じ場所で同じ歴史の中で△体験▽した僕らの斗いが生きづけている限り、僕らにとって別れといふものはないと言っています。△斗いとは何か？……と僕たちは心に問いつづけて、この斗争を自分のものとして斗ってきたと思います。時には自分の弱さに自己嫌悪におちいつたり、自らの意志の強さに自己のほりおとしたものの大きさにふととまどいを感じたりしながら……僕たちは斗いつづけてきたわけです。しかし、△斗い▽とはけつして波手を行

動でもなく、ストライキをすることでもなく、もっと誤解をおそれずに言えば、政治的行動をするということではないと思うのです。『獄中十八年』をほこった共産党が、自ら非転向の転向と化していく様に、僕らには常に斗いの錯覚への危険がひそんでいます。それをのりとえてゆくのは強制な意志と明晰な論理だと僕は思います。それは常に自己を対象化し、向化してゆく、ラジカルさであり、そのうえにはじめて僕らの運動論一組織論、戦略構築の可能性があると思うのです。妻や子を食わせる（多分近いうちにそうなるだろうけど）、自分が食つてゆく……といふ生活に於ておどろくほどの早さですすめられてゆく権力の蚕食をくいとめ、自分の△ことば▽をもつこと……僕らはとにかく、すばらしく危険なつなわたりをはじめようとしているのであり、それは誰もが同じ条件にあるのだと思います。去つてゆく学友諸兄によろしく伝えておいて下さい。

ではまた手紙でも書くつもりです。よろしかったら、どなたでもけつこうですから御返事を下さるとうれしいと思います。どうもピラだけだとよく判りませんので……

五月十二日 東京拘置所にて

追伸 加藤さんへ

先日は、おハガキとそれにすずらんどうもありがとうございました。お宅の方へはどうかと思いここでお礼させてもらいます。すずらん……ほんとに可愛いくて、すてきな香りでした。

四・二八関係があえて、大変忙しいことと思いますが、お体に気を付けてがんばって下さい。

組織・主体性・運動…これはとてもむずかしいと思いますが、一方では歴史的につまり、新左翼の課題としてきたものとその論争など）他方では運動論的に考えてはどうでしょうか。後者の問題として、少しずれるかもしませんが、藤本進治の『革命の哲学』（青木書店）『革命の弁証法』（せりか書房）などお読みになつたらどうですか。やや問題点もありますが、非常にユニークだと思います。

主体性論は、梅本克己・黒田寛一などいろいろありますが、僕はむしろそれを否定的に見た広松涉氏の諸著作の方がすぐれていると思います。広松氏は旧ブントの一員で四・五年前まで東大で活動し、東大新聞などに学生運動関係のことなど書いておられた方ですが（その切り抜きここを出たらおみせしてもいいのですが）構造主義と似かよった視点から、それをはるかにこえていると僕は思っています。特に今年の『思想』二月号は弱点もありながら面白いものです。（大内さんが読んだ様ですよ）

なお、いろいろ詳しく書きたいのですが、今日は先日のお礼まで

五月六日 束拘より

の涙をのんだ次第です。

前略  
板谷基明(仮名)

分離公判と長期不当拘留に抗議して四月二十九日よりハンストを行なっていましたが残念ながら五日で挫折してしまいました。

三日目に懲罰房に移され、四日目に医師の診断を受けました。そして五日目に診断の結果、これ以上続けると正常な体への回復が不可能になる恐れがあることを告げられ、そのようなことにならない為に何らかの医療処置をする必要がある旨説明されました。

医師はいろいろ説得しようと努めましたが、私が“分離裁判に出廷させることを意味するいかなる医療行為も拒否する”と答えたところ、あきらめたのか、診察室から出て行きました。そして、しばらくして看守が迎えに来たので舍房に帰るのであろうと思っていたところ、何くわぬ顔で病棟に連れて行きました。一室に私を閉じ込めてベットに寝るように命じました。

私は“何をするのだ、法的根拠を説明しろ！”と言つて抗議しましたが、“話す必要はない、甘ったれるな”と問答無用でベルトでベッドに縛りつけられ、両足太股に管のついた針を差し込んで、一、〇〇〇CCの液体を体内に注入されてしまった訳です。

何しろ抵抗するにも、力が入らずおまけに多勢に無勢、無念

権力に身体を拘束され、その上、弁護団・救対による統一公判への努力もかいなく、一切の救済手段を奪われてしまつた我々にとって、ハンストは最後に残された唯一の抵抗と抗議の武器であると考えていたものが、かくも簡単に挫折してしまつたことを思うと、栄養液の注入で象のようにふくれあがつた自分の股を見るにつけ返す返す残念でならない思いです。

それにしても、このようなナチも驚く非人道的な医療行為が公正な法の裁きの為にという美名のもとに現在の裁判制度の一環として行なわれているのだということを徹底的に暴露していかねばならないと思います。

僕は残念ながら、このような最後の“自由”をも踏みにじる強制的栄養補給の手段の前にあえなく屈服してしまいましたが、まだ頑張っている学友が居るかもわからないことをお知らせしておきたいと思ひます。

そして彼らは以上述べた手段ばかりでなく、鼻の穴から管を通して胃に養分を送つたり、その他様々な卑劣な手段をも用意していると思われます。

最後に、私が強制的栄養補給を受けている時、“これはなかなかいいじゃないか、一番怠け者のやる事だ、口も動かさなくていいし、胃も動かさずに栄養を取れるのだから、俺もめんどくさくなつたらやつてもらおうか”とまるで実験台のモルモットを眺めるように冷やかなまなざしで僕を見下しながら言つた看守の言葉は生涯忘されることなく、深く胸の奥に刻まれてい

ることをお知らせしておきたいと思います。（乱文乱筆の許しを乞う）

それでは統一公判でお会いすることを誓つて／＼

## 四月九日 東拘より

三 角 清 人（仮名）

前略

先日手紙拝見しました。カッティングの文字にもどこか見おぼえがある様な気がします。どうやら新学期というのでしょうか新しい仲間を含む斗争の季節というのでしょうか。残念ながら充分に活動出来ないのが欲求不満になる感じ、独房の中では毎日本を読んでいます。色々な事は豊富になっています。いつも悪い頭がはれつしそうに理論がかけめぐつて「畜生、出たら……」と思つています。第一中では何も斗えないのだからしかたないたゞ公判でもなれば全国に向けて全世界に向けてアシリまくろうと思つています。ローザじゃないが、最後まで叛乱を呼びかけてやる気構はありますから御安心下さい。今日「拘留取消の請求」の書類を提出します。だがこんな手続はブルジョアのマヌ操作の氣構えにかゝっている位のもので現実的に考えれば不當か不當でないかの問題じゃない。力関係以外には解決のしよがない事は理解しているつもりです。色々と政治組織の機關紙がはいつてくるので全部すみからすみまで読んでいますが。

セクトとはあんなに「ナンセンス」だったのかと今更の様に考えざるを得ない。ただイデオロギー的に信じてしまえばどうにでもなる集団かと思っています。

今はまた四・二八を前に何かといそがしい事だと思います。今年の春斗はすごく流動的な様に感じます。下部青年労働者がまさに分裂を開始している感じですね！

やはりこんな事実を前にしたならどうしても革命党の眞の形成が叫ばれるを得ないと想います。やはり今や日本階級斗争の発展段階に主体の形成が遅れていると言わねばならない。少なくとも全共斗組織の意義や、パリケード占拠斗争の意義を科学的に提起しなければならない時点なのだが、現実の運動に遅れてついて行く自然発生的思维型態の思想問題に理念問題に転落している。全共斗運動をはじめ全国学園斗争をするなど突出した日本階級斗争の発展段階はノンボリ・ラジカル集団も含めて混乱する思想斗争意識の中であるで高所恐怖症患者が東京タワーにでも登った様な感じがする。それはすでに彼らの目的意識なる言葉が決して目的性を持つてゐなかつた事を意味するであらうし、階級斗争がますます厳しく精密さを要求する段階に入つてゐる事を認識する以外にないと思います。

兎に角叛乱は開始された。バルチサン斗争は必至である。言わば僕達は逮捕などというよりも捕掠というのが正しい感じである。

獄中のバラードより。

外で斗つてゐる同志諸君の返展を祈ります。

カ。▽

## 五月二十一日 東拘より

余田 仁（立命大）

始めてお便りを差上げます。今まで「獄中書簡集」が四冊入って来ました。もつと早く、手紙を書きたかったけれど種々の事情 家族帝国主義との熾烈なる斗争と勝利、学校の友人への便り、「造反」（造反有理—革命無罪）への投稿<sup>①</sup>のため、ついつい書きそびれて居りました。

「獄中書簡集」について、若干感じてること、思いついたことなどをならべ、今后の糧にしてもらおうと思います。

△その一▽ほとんどが私信故、多少意味の通じない所もありました。尤もこれは望む方が無理な注文ですが。でも、みんな生々とした文章を書いてます。独房にとじこめられた人類戦士△人間ではない▽たちの発する熱い気迫が満ちている。人類の前史を生き抜く階級戦士として、みんな胸を張っているではありませんか。

△その二▽ この書簡集が商業ベースに乗らぬことは、非常によかった。書簡集がうわべの圧巻さに較べ、その中に素町人根性がのぞき始めたら、もう耐えられるものではないですから。行動から遊離して彷徨しはじめたらもう、唯金もうけ主義に走

りますから。△ダマサレルナ、決シテ見ルナ、本屋ハめどりさノ首ダ。石ニナツテシマツタ書簡ナドデ、誰が踊り出スモノカ。▽

△その三▽ 表紙に載せられた巻頭言が実に愉快である。パロディや、若干の洒落氣がイヤ味ではなく、「あの日」東大で斗つた人なら、そしてこれからも斗うつもりの人なら「うん」とうなずくでしょう。

△その四▽ これは△その一▽とも関連するが、論文調あり、隨筆調あり、哲学「者」調あり実に豊富な表現形態である。あたかも、獄中の人間たちが来たるべき「人類」の時代における人間性の全的な開花を意味づけているかのように。半腐れの魚の目のようにドロンとした生氣のないあの加藤君の目は、ぼくらを今、獄中につないでいるけれど、多少の肉体的消耗以外、誰もへべらないことを示すかのごとく。

今井君へ恐らくそうだと思います。検閲のため誰かわからないけれど、MLの人だし、青医連らしい。もしまちがってれば許せ。△が「第三（四号）」に連載してますが、彼の最後の一文（第四号、P 8 121～30）は考えさせられるものがあります。以下引用。△現在、非常に狂暴化した弾圧の下で多くの学友諸君が斗つてゐるのを厚い壁を隔てて聞くことしかできないのは何よりも辛い。我々にできることと云えば、長期不当拘留による弾圧に屈さずがんばることと、外の同志諸君に迷惑をかけないことくらいなのだろうか？ 我々、自由を奪われている者は日々の拘留生活の中でもるべき日のために理論と知識を貯め込

んでいるだけではないのだ。日々身体を耐えていたこと、そして、何よりも支配階級に対して、怒りと憎しみの炎をますます

高く燃え立たせているのだということを彼等は思ひ知るであろう。——権力に対して不斷に復讐の牙を磨いておくこと……怒りと憎しみの炎を高く燃え立たせておくこと……を忘れないこと。同志諸君への提言。

日々、新たに権力の足下により深く、より巨大な壘壕を掘りつつある獄内外の同志よ。國家権力は大学解体へ登りつめた我々の権力を壊滅せんものと必死だ。だが、権力の意図とは逆に彼らのよって起つ基盤は日々労働者・学生の手で蚕食されていく。我々は敵を「成程的には軽視し（紙虎）、成程的には重視する。我々は敵を「成程的には軽視し（紙虎）、成程的には重視する。（生虎・鉄虎）」資本家どもは永年の経験から、自分たちを巨大に見せる術をこころえているから、彼らの内部に起つる一つの腐敗は、簡単に見えないだけだ。同志、戦士諸君！ 日々新たな壘壕を構築し、来たる「戦略的反抗」にそなえること。

「鉄砲から政権が生まれる。」「革命とは、権力の問題である。」等々の言葉を、半ば教条的に、半ば経験主義的に信じて勝利の晩まで斗い抜こう。「未来は我々（青年）のものである」（毛語録パロディ）

ものはや紙数も尽きたる由、ではござんよろしゆう。

## 五月二十日 東拘より

奥津久男（仮名）

○ 同志諸君、お元気ですか。五・一九加藤シンボ粉碎斗争について、ラジオで知り快哉、中教審答申―大学特別立法―全教育斗争圧殺の道を歩まんとする政府・支配階級への断乎たる反撃の体制構築を突き進め！

○ 機関紙三十一号、三十二号とても感激的であった。三十一号の四・二八斗争報告は豊かな現実が明らかに言葉を乗り越えてしまっているという様子が現われており、労働者階級の限りなく偉大な政治的独立に向けての我々を中心とした斗いの前進全国各地でのプロレタリア統一戦線派の斗いの前進が報告され、七十年斗争に向けての“全軍躍動、体制が構築されつつあることをギッシリとつまつた斗争報告の紙面に於てあらわれていたと思う。三十二号に於ては、かかる斗いの方向性、意義がより深化されて展開されており思わず“すばらしい！”と叫びたくなった。何度も僕が手紙に於て強調してきたように、プロレタリアート自らの政治、というものを我々が獲得して行くことは、現下の階級情勢に於て、また中核派など小ブル諸分派の“政治”によりその威嚇的巨姿をあらわにしつつあるプロレタリアートの隊列を小ブルの物理力、合唱隊におとし込められてはならないが故に不可欠の急務である。

三十二号に於ては、このプロレタリアートの政治を、その三つの側面に於て展開しており、その意味に於ても高い意味を有

してい。一つには、前衛的共産主義的視点・世界史的視点から政治過程・社会過程、二つには党的階級的視点からの、そして三つには、大衆的直接的政治が、それぞれ相互に連関づけながら展開されている。僕は、このうち、第二の課題について言及したい。“プロレタリアートの政治的独立こそ急務であるとするこの論文一かかる論文は分割掲載ではなく一挙掲載こそ望ましいが、は、六・一五問題とそれへの我々の対処についてのべながら、我々の階級的政治性とは何かということを現在的に展開している。とりわけ、五派共同声明なるものについての我々の対処、及び中核派、革マル派との反スラム派の本質的批判は、まさしく正論をうがつものであり、断乎として意義なしである。

中核派は、そのあらゆる見せかけの言辞にも拘わらず、本質的には組織拡大至上課題主義者であり、レーニン主義の一一定の革命的側面を抜き去り、“何をなすべきか”の陰謀主義的組織操作主義的地平にレーニン主義を固定化してしがみつく小ブル分派である。彼らに於ては唯一の実体・歴史に於て自由な主体は“中核派”といふ党派ないしはそれに結集する人間集団へと切りつめられている。“労働者階級解放は労働者階級自身の事業である”という第一インターの命題は“街頭行動も、学生ばかりでなく労働者が狙わねばならない”という意味におとし込まれてしまっている。ショック戦術と党派の水ぶくれ的拡大これが唯一者としての実体である彼らの運動の本質的中身である。一方、革マル派が大衆組織を彼らのイデオロギー宣傳として

ての大衆操作、支配を貫徹するための官僚的事的統治機構化せしめる事これが彼らの“組織戦術の緻密化”なるものの中身であり、彼らの“最左翼性”なる自己意識の素裸の姿である。

（なお、獄内にあって、クロカンのヘーゲルとマックス・を全体通読する機会を得て一言ヘーゲルの大論理学の、とくに、第三卷概念論、第一篇主觀性（概念、判断、推論）第二篇、客觀性（機械観、化学観、目的）第三篇理念（生命、認識理念、絶対理念）という構成に全く依拠し、これを梯明秀の「ヘーゲル概念のレーニン的転倒・弁証法的概念としての物質」というカタゴリーを観文のように唱えて、将棋倒しのように順序よくひっくりかえして行く、この過程を称して“ヘーゲルとマックス・としているものであり、この事から直接に革マル批判につながらないにしても、ヘーゲルの精神現象学・大論理学・自然哲学・精神哲学の構成に對して、何とこれをのりこえるに浅き、いなへーゲル主義に骨までとりつかれたクロカン哲学の性格を示唆するものではないか）

とも角、七〇年安保・沖縄斗争、七〇年代階級斗争を我々が斗い抜いて行くに当って、プロレタリア的政治性を自己自身のものとして獲得し、小ブル諸分派との党派關係に於ても鐵の原則として貫徹するに至るまで血肉化する事、これが不可欠の課題である事は言うまでもないし、実践に於て直ちにぶつかる問題であり、ねがわくば、昨年の六・一五問題、全学連大会問題そして、十二月の対革マル分派斗争の総括に即しつつ、徹底した討論による組織的意志一致をかち取らん事を

○ 早大斗争の規局面及び東大斗争の諸問題について、何ら明

きらかにされていないのが只一つ残念である。何度も繰り返して言うように対革マル分派斗争は、いわば我々の宿命的課題で

あり、その主決戦、は早大での斗争なのだから、もし、一瞬で

も均衡状態に安んじてしまふなら、短い息つきの時間をそれ以上るものとしてしまふなら、全くそれは我々的なやり方ではない、ということである。以前のべた意見を真剣に考慮してほし。

○ 真崎猛哲君へ 僕は自己自身追分寮の住人でありながら、君を知らないのです。おそらく、君もあの影丸の様に、影分身の術を用いて支配者を大いに悩ませ怖びえさせる忍者<sup>リゲリラ</sup>戦士であり、分身が本体であり、本体が分身である様な忍術を心得ているのだろうから、僕もまた君の本体について云々するのはやめなければならないだろう。

さて、獄中書簡集（題名は、これ、そのものでよいのではないか？）第四集まで読ませてもらっています。氏名は黒インクで塗りつぶしてあるから誰れの手紙なのか、AなのかBなのかはたまたXなのか、Yなのか、特定しきえないものでありながら何と個性的な、何と全面的に発展せんとしつつある、人間そのものの、たちの手紙なのだろう。これほど深く人間的共感を共有しあうことができるとは、僕は独房の中で、一人革命の現在性と永続性について思いを致し、ニヤリと笑いながら同時に涙を流しています。（御存知、一人でニヤリと笑う男<sup>リ</sup>僕が誰なのか、すぐ分る被告人<sup>リ</sup>獄内同志も多い事と存じます。）あとがきに、『獄中書簡集』は偏向すべきか、否か、という

事がのべられていたが、もしノン・セクトラジカルなる（最も醜悪な下半身を喪失した部分）視点から述べられた意見なら鐵錐で粉碎すべき遇見であり、断乎ハ偏向を貫徹せよ、と言いたい。

ブルジョア社会の最も深い非人間化に、全身をもって、現実の自己の血と肉の総体をもって対決し斗い、まさに人間そのものとして生きかつ死のうとした部分の記録は何としても残されねばならない、この資本制社会の腐敗した現在直下に公然化されなければならないのであり▲外▽で活動する君自身の任務であり、類的生命を確証する道なのである。

一・一八・一九斗争に関する革マル派の戦線逃亡についての意見が述べられていたので一言したい。（敵権力の完全包囲下に置かれている現在、詳細をのべ得ないのは当然であるが）一・一九・一九斗争に関する革マルの関わり方は正確に言うならば、戦線逃亡と言うよりもむしろ責任無能力、に転落してしまっていた。“人格破産者”に責任云々しえない、そうした状況におちいっていたのが事の眞実だ、このように云えるのではないか。それは何故か、といふと、一つには、彼らは敵権力の機動隊を尖兵とした封鎖解除斗争圧殺、学内正常化という現象的な階級的攻撃に対して、如何に対決するのか、という課題には、故意に（そうだ、まさしく故意に）目をつぶり、”原則的な大衆組織化”が必要であると主張したのである。そして、前者については、文学部防衛をつきあい的に主張した（全其斗が文・防衛を自己の唯一の方針としている、ということが考えら

れようか）以上に何事も云わなかつた。後者については、”大衆”的の斗いの現在的中身の深化抜きに組織化が語られる場合、それはまさに反動的カンパニア路線でしかなく、大衆を彼らでオロギー官僚の合唱隊におとし込めるものでしかない。（何

と民青的、スターリニスト的体質ではないか。）以上の事から明らかなどく、彼らとして、安田講堂攻防斗争は課題としてたてられていなかつたのであって、その事を敵前逃亡であるか否か、（もちろんその犯罪性は僕の満身でもって彈劾したいのだが）を云々するのではなく、むしろ全其斗の内部潮流として彼らの存在を許しておく事自体が正しかつたのか否か、全其斗として総括すべき問題でござると僕は考える。そしてそれは、我々が十二月の段階で革マルも含め我々以外の余まる部分が我々に反対したところの、革マル斗争（まさしく単に早大の問題として東大斗争に以外的な問題を単に無媒介的に持ち込んだと云われたが）の東大斗争に於てもつ意味、そして日本学生運動に於てもつ意味を提起しつづいた過程を再度とらえ返さねばならない事を示しており、後向きの姿勢どころか、前向きたらんとすればさけて通る事のできない課題なのだ。（後向きとは、あのトリデの上に我らが世界を、の過去の東大斗争をただそのものとして叙述し固定化することしかなしえずその当然の結果として斗いを真ににない切りひらいてきた者の苦悩と飛躍については何ら解明されていない虚作のようなものをさすのであり、特に醜惡な座談会を見よ。その中で述べられている革マルと、メラ付きの素晴らしいもするお部屋にしばり

かかる固定化は許すことができない誤まりであると考える。）以上、ノンセクト的諸君の看過しえない（僕にとって血肉にかかる）。問題について、僕の意見をのべました。再考してほしく。

それでは、諸君お元氣で。僕のこの手紙をNo.3において若干消去すべき部分もあります。坂本君参照、No.1～No.6まですべて掲載して下さい。それは何ら偏向ではない。

東拘にて

## 五月十六日 東拘より

小沢 哲（仮名）

-11-

取り戻せたかと思つていたのですが、やっぱり今日などもニヤ

ニヤしてしまってダメですね。岡山大で若い機動隊員の人が死

んだ時、僕は僕が自覚的に斗争に参加してから始めての死者だ

つたせいも手伝つてか強い衝撃を受けました。山崎君が死んだ

時、僕は予備校生だった。僕は反日共系全学連の人達はすごい

など思いながらも、とても死ぬなんて僕には関係ないと考へて

いたんです。そしてその考へが頭から抜け切らないまま安田講

堂に入つた僕は“死”とは何か、“生”とは?と今つくづく考

えさせられています。人間の死は、それがたとえ機動隊員とし

ての死であろうと革命の英雄としての死であろうと関係ないと

考へる僕が斗争を前進させてゆくことができるだろうか。僕は

今、僕の生の内に(竹内哲郎さんも書いていましたが)“死”

を包摂せねば真実の生を生きられないとの言葉を最も自分の考

えに近しい考へだと思つています。僕はテンデカッコヨクはな

いかもしない。死でも一端僕の生のプログラムの中に乗せて

しまつたならば死なねばならないでしょう。

※ 岡山大全共斗の警官を送る言葉には失望しました。「犬」という言葉は僕の耳になぜかとてもみじめで汚をらしく響きました。僕達がヒステリックに青白い陰うつをビートビート声「ボリ・公カエレ！」を絶叫している時僕達の“顔”は美しくないと僕は思うんです。ケリラ戦において自分の殺した敵兵の横を進撃する時のあの一瞬の深いそして重い意味をこめた沈黙を死んだ若者にも僕は捧げたいと思います。

ではまた。

一、公判について  
二、待遇改善について  
三、救対はこのスローガンをどうして掲げないのでですか?

## 五月十九日 東拘より

田川秀一(仮名)

### 一、公判について

弁護士より第一回分離公判が五月三〇日に強行されると聞きまし。東大大学院グループらしいですから、安心はしていますが救対も頑張って下さい。

さて、今、私(達)被告人は公判を救対まかせにしているところがあると思うのです。至急被告團を結成し、不便ながらも被告の意見を集結しそして方針を決めるのが本筋思います。さし当つては第一回分離公判を粉碎した後の我々の方針を決めなければならない。今迄のようにただ救対の指命があつて被告がそれに従うというのではアベコベだと思う。救対が我々被告の意見を集約して方針を決めるのでなければならぬ。その点、ぼくも今迄、救対に対し意見を表明しなかつたことを反省しています。

ぼくは、統一公判まで一年でも二年でもというのは単なるリゴリズムで、そういうのはいっぱいあつたと思う。ここでしかし、ぼくははつきりした方針が出せない。肉体的にいえばぼくは一日も早く出たいです。(もう二ヶ月以上寝たり起きたりで、眼も悪く本も読めない状態なのです。)他にも体の悪い学友はいると思う。そしてそういう学友達がボコリボコリと抜けて行つているのではないかと思う。

監獄法施行規則

の必要な部分をマス・プリすべきです。小菅では室内筆記が許されてゐると聞く。それに対し東拘は一回四〇分だといふ。全くひどい。これでは被告の防禦権はないに等しい。

中野でも「所長面接」をしてゐるのはぼくだけのようです。皆が要求しなければだめです。（正直言うとぼくは面接請願が肉体的につらいので皆にかわってやつてほし）のです。（この段落、官憲の手により抹殺されていたのを解説）

三、二と同じようなことです。昨晩あるアクシデントがありぼくは直ちに抗議しました。（そのことにについて書くとたぶん検閲されるので省略します。）問題はぼくらの側です。みんな拘留不感症になつてゐるのではないでしょか。昨晩はぼく一人しか、この病弱なぼく一人しか抗議しなかつたのです。そして長い議論にはくは肉体的にもう疲れました。学友の拘留不感症を治療すべく、ハッパをかけて下さい。

今、医師の診察を受けました。マイローゼだそうです。二ヶ月ずっとそうです。

先日「私の病名を『神經症』としていますが、本当は何だかわからないんでしょ？」ときくと「ウンわからん」と若い医師は正面に答えました。大変頼り申せがあるといふのです。

山本義隆様

バラの花弁は茶色く萎れてしましましたが、白百合は気品高く咲き続けています。十八日付朝日新聞を読みました。七月二

日以来七ヶ月一緒に斗つて来た者として、その感想を述べます。

私は山本さんをよく知っていますが、山本さんはぼくの顔を見ないと誰だかわからないでしょ。いつだつたか「アサヒ・グラフ」の広告で元氣そなを拝見し安心しました。

私は一月十九日逮捕以来、現在中野刑務所に拘留中です。三月下旬より健康を害し、特に四月中旬より眼が悪くなり、ほとんど読書できませんので、「第一回公判粉碎ビラ」（五・二教対）など印刷が悪くとも読めませんし、「進撃」も入らないので、全学共斗会議については新聞に載つてゐる位のことしかわかりません。

さて、山本さんが「手記」を朝日に寄稿したのは、山本さん個人の考え方なのか全共斗決定なのか私には全くわかりませんが、いずれにしろ出すときにしてんじゅんじゅんがあつたものと思ひます。そして深考の上、寄稿したものと推測します。

現実的な斗争をコミュニケーションの問題にすりかえられてしまったと思うのです。山本さんの文章は朝日の枠を考慮してじょうう注意深く——朝日的に表現すれば「静かな調子」で——國家権力の暴力性について、或は所謂「帝国主義的再編」についてさけておられます。そのことによつて朝日紙上に掲載され、そして「東大正常化への道」なる表題のもとに加藤と山本さんの文章がワンセグメントに包摂されてしまつたと思います。高度に発達した我が日本国家独占資本主義はほんと全てを許容するかのようですね。支配者の抑圧的寛容の恣意の範囲内で。すべての斗争が改良斗争としてダウントしてしまうという状況です。だから、書きた

いことが書けないものはやはり書くべきではないと思うのです。

### 一 読者より

かの悪名高きスターリンの言語論をひきあいに出すまでもなく、言葉はぼく達の自己表現であり、最底の（であるが故に最高になりうる）武器なのですから。

ぼくは東大斗争について考える時二つのアクシスが考えられると思う。

一つは言うまでもなく帝国主義体制の一環としてある東大であり、もう一つは明治百年近代日本思想史の中の知識人の背ってきた負荷として考えられると思っています。

ところで最近の全共斗ですが、ぼくは全く反対の立場です。

全共斗は東大斗争を徹底的に斗い抜く、東大をつぶすまで斗い抜く、そのことによってしか未来なんて見えないんだと思します。今全共斗は少くも救対のパンクによれば「安保粉碎・日帝打倒」というスローガンを掲げています。東大につぶすことができるなくて何が安保だと言いたいわけです。ぼくの視界には日帝などとも入りません。未来は盲目です。真暗です。

以上あまりまとまりませんが、東大斗争を斗っている一学生として感想を書きました。

なお、私の病名はオールウェイズ（二ヶ月間）「ノイローゼ」だそうです。大変便利な病名で、私も大変安心できます。

お手紙拝受。さらに二号、三号をお送りいただきありがとうございます。（少くて申し訳し）

獄中の見知らぬ学生諸氏の肉声が、ともすればこの「生活社会」において合理化→合理化へ向ってしまいます。私を少からずひっぱたきます。そのお礼の意味をこめて。

さて、わが斗争は、△敗北なき敗北▽を遂げ、落着しました。わが「首」は撤回されましたが敗北は敗北です。何に負けたかといえば、△組合▽共同体幻想に破れ、△企業▽共同幻想に破れ去ったのです。

わが組合は、非妥協のスローガンをかけつつも、いつのまにか、中小企業特有の「自然倒産」の危機に出会うや、右旋回ト妥協△。その妥協の產物が私の首切り撤回です。戦後民主主義思想の労働運動における△組合主義▽への浸蝕を突破できるのは、△生活社会▽への回帰△自然への還元▽を克服する思想とその表現としての行動形態△暴力▽以外はないのですが、私は私の力量のなさが露呈した斗争として総括しています。（いざ詳しく述べます）

さて、書簡集の中から感じたこと。水上二十六号氏の短い文章の中にいくつかの「発見」をし、驚ガクしています。彼からなるたけ多く、カッパライをしていきたいと思います。

さて、私が逮捕された某出版社の争議は、私らなりに企業共

同体粉碎／企業解体・打倒のスローガンでたたかいぬこうとしたものです。

この斗争は十二名逮捕、起訴五名、拘留最高一四〇日という程度の弾圧でしたが、今、総括の真最中です。総括ばかりというのはナンセンスですが、この共斗会議に参加したメンバーの中に、さまざまな斗争論があり、諸党派の引き回し（？）もあり、統一した共有できる見解を持たないと受けつけられないということから、△総括▽作業をすすめていきます。

さて、五月二一日の集会には、是非行つてみたいと思います。わが斗争の不充分性を補う意味でよそ様の斗争から盗めるものは盗んでいきたいと思います。よろしく。

## 救 对 通 信

獄中の学友へ二十七日分離公判担当の浦辺判事からの“心のこもった・ラブレター”が届いたであろう。「刑訴法では被告が出廷しなくても審理できることになっているが、いまのところそれは考えていない。審理がすすめば、保釈についても当然考えたい。」と露骨などう喝をしている。裁判所が長期拘留を分離公判強行に対する担保にしていることは彼の言葉で明白である。このような悪質な階級裁判を断乎粉碎しよう。今回の裁判闘争を今後の階級裁判粉碎闘争の巨大な一步とする必要がある。し、現に拘留理由開示公判闘争が四・二八統一公判獲得闘争に

おいても、その成果を生かされようとしている。東大闘争分離公判粉碎闘争が、四・二八をはじめとする今後の弾圧体制への反撃を左右する重大な闘争であることを認識ねがいます。地裁は分離公判を七月二十九日まで（五月二十三日現在）指定してきました。獄中の諸君は地裁横川所長代行へ抗議書、担当判事に出廷拒否理由書、分離公判強行抗議書を出したうえで、裸になつて出廷拒否をしてください。もし、それでも強制的に連行された場合は人定尋問以前に判事に分離公判強行に対する抗議を行なうことで、人定尋問をさせず、公判を流すよう闘つてほしい。我々獄中諸君の闘いが一番重要であることを明記してほしい。公判期日表を載せておくので、全ての公判の日に對して抗議書を地裁につきつけてほしい。

\*\*\*\*\*  
（十八頁より）  
\*\*\*\*\*

○ 獄中の同志と文通を。「第何号に出ていた誰々に手紙を出したい。」と言つて来て頂ければ、本名をお教えするから、どんどん中の人々に手紙を出して欲しい。  
○ 東大斗争に関しては、拘留者全員にさし入れているが、他の斗争でバクられた人にさし入れたい場合、知らせてくれば安くおわけするつもりである。また、それらの人々の書簡も、もちろんのせてゆきたい。

「獄中書簡」発刊委員会

| 月 日  | 時 間   | 法 廷            | 判 事 | グ ループ 名         |
|------|-------|----------------|-----|-----------------|
| 5.27 | 10:00 | 703            | 浦 辺 | 安 田 講 堂 ( 16 )  |
| 5.30 | 10:00 | 703            | "   | 安 田 講 堂 ( 6 )   |
| 6. 3 | 10:00 | 703            | 小 松 | 法 研 三 ( 1 )     |
| 6.10 | 10:00 | 701            | 木 梨 | 安 田 講 堂 ( 18 )  |
| " "  | 10:00 | 703            | 浦 辺 | ラ ク ビ - 場 ( 2 ) |
| 6.14 | 10:00 | 502<br>( 戸 田 ) | 柏 井 | ラ ク ビ - 場 ( 3 ) |
| 6.17 | 10:00 | 701            | 木 梨 | 安 田 講 堂 ( 8 )   |
| 6.20 | 10:00 | 506            | 齊 川 | 列 品 館 ( 2 )     |
| 6.21 | 10:00 |                | 千 葉 | 列 品 館 ( 1 )     |
| " "  | 10:00 | 505            | 播 本 | 安 田 講 堂 ( 1 )   |
| 6.25 | 10:00 | 701            | 播 本 | 安 田 講 堂 ( 1 )   |
| 6.26 | 10:00 | 506            | 齊 川 | 法 研 三 ( 少年 1 )  |
| 7. 2 | 10:00 | 701            | 播 本 | 安 田 講 堂 ( 1 )   |
| 7. 8 | 10:00 |                | 木 梨 | 安 田 講 堂 ( 18 )  |
| 7.10 | 10:00 | 506            | 齊 川 | 法 研 三 ( 少年 1 )  |
| 7.15 | 10:00 |                | 木 梨 | 安 田 講 堂 ( 8 )   |
| 7.17 | 10:00 | 506            | 齊 川 | 列 品 館 ( 2 )     |
| 7.17 | 10:00 | 501            | 播 本 | 安 田 講 堂 ( 1 )   |
| 7.22 | 10:00 |                | 木 梨 | 安 田 講 堂 ( 18 )  |
| 7.29 | 10:00 |                | 木 梨 | 安 田 講 堂 ( 8 )   |

なお、獄中書簡諸君に訴える。東大闘争分離公判粉碎の闘いに参加ねがいない。地裁に対する抗議書をつきつけること。実際の公判を粉碎すること。このことは単に東大全共闘に課せられた重大な任務であると同時に、國家権力の弾圧機関である裁判所への全人民的内容をもった闘いであるから。

なお、東大全共闘救対はパンフ、東大闘争統一公判勝利のために（一〇〇円）を発行しました。ぜひ購読され、我々の闘いの意義を理解してほしいと思います。

#### 東大全共闘救対情宣部

### 五・二一 拡大編集会議総括と

#### 今後の我々の方針

「獄中書簡集」発刊委員会は、三つの位置づけを持っていました。  
第一に、獄中斗争の機關誌、第二に外への情宣、第三に売ってカンパをかせぐこと。しかし、重大な何かが欠落していたことを我々は思い知らされた。それは、我々にいくつかの小さな挫折という形であらわれた。

第六号の編集会議の時であった。我々の手元には、いつになく手紙が少なかった。なぜか。今、一般的に手紙が来ないのではないか。我々は、何よりも獄中から手紙が来ることを期待し

し作っているのに、なぜ投稿がないのか。我々の仕事は獄中の人々にとってゼロなのか、マイナスなのか。ならば作るのをやめる他ないではないか。

手紙が集まるまで、少なくとも五月二十一日に予定された読者との拡大討論会まで、編集をのばすことにした。気が重かった。



ルオーでの討論会は、そうした気の重さを吹きとばしてくれた。白熱し、いくつかの衝撃と新しいイメージ。それは何よりも、我々、「外にいる」発刊委員会にとって獄中書簡集とは何かと問う形であらわれた。以下、討論にもとづいて、「我々の斗争宣言」としてのこれからの方針を展開してゆきたい。



#### ◎ 我々は方針を持つべきだ。

我々が、なぜ獄中書簡集を出すのか。同情、ヒューマニズム、一八・一九斗争神話化。そうしたものでは決してない。我々は、他の誰がやってもよい仕事をひきうけているのではなくまさに、我々のために、この活動を続けてゆくであろう。我々の方針のもとに。

◎ 全員が拒否反応をおこしても、我々の活動は続くだろ。「中の人たち全員が拒否反応を示さない限りつづける。」と始め、我々は言った。「手紙が来れば出す。こなければやめる十なんと御立派な日和見主義。

我々にとって、何らかの意味のある活動で、これがあるな

らば、「手紙が来ない。」という事態に安穩としていられようか。

あらゆる手段で獄中から言葉をバクって来なければならぬ。誰もが嫌だとしても、我々は、我々が必要としている言葉を奪いとつて来なければならない。

全員が拒否反応をおこしても、我々はくじけずに、出しつづけるであろう。たとえ編集後記だけの「書簡集」であっても。

又、獄中からの豊かな言葉でそれを埋めることを我々は断固として貫徹するであろう。

◎ 本当のアジを我々は求めている。

我々の欲しい言葉は、人をバクることのできる言葉だ。なぜ「斗わざるをえない。」かを、すべての人々にわからせる

ような言葉はないものか。政治綱領でも、経済分析でもなく、

論理的ですらない何か。「全てはわかる。しかし僕は斗わなじ。」といふそのひとを動かす言葉。

外の我々は「なぜ斗わざるをえないのか。」といふ問から逃げられる。日和るのだ。しかし、中の人々は「斗ったことの結果」に包囲されて生きていく。(我々とて、実はそうなのだが)そこで考えることが「僕はなぜ斗ったのか。」といふ問を生まないことがあろうか。

我々は、そうした問から発する言葉の一つ一つを頂戴するであろう。そして、あらゆる人をバクることのできるアジを作り出すことを目指すのだ。

◎ 我々は過去にももねるのではない。

だから、昔おこった事件に頼ることを我々はしない。逮捕された時点でとまってしまう時計ならば、それを粉碎しよう。日々、生み出される言葉をこそ求めるのだ。

それ故、東大斗争に限る理由はない。他の斗争・労働者の斗争その他バクられた人々の書簡も、同じようにのせてゆきたい。

◎ バスチーユをも展望する運動に。

なぜ、我が國の斗争者は、過去、逮捕されるやおとなしくなつて了つたのか。耐えることのみをおぼえたのか。ひ弱さ。遠い未来、我々はバスチーユをも展望しよう。今やれることは、ささいなことだ。しかし、一步は一步だ。我々はどこまでも行くであろう。



以上のような「斗争宣言」をかかげて、我々は遅れてしまつた第六号の編集にとりかかつた。以前よりも、もつと確實に、我々自身の活動として、この仕事を続けてゆくのだと決意しながら……。

お知らせとお願い

○ もうと手紙を。獄中の諸君も、外の友人諸君も、我々のところへ、手紙をよこして欲しい。我々が選択に苦しむほどに。

○ 読者の投稿ものせることにしたので、獄中書簡の内容への批判、感想等、書いてきて欲しい。(十五頁へ)

\*\*\*\*\*  
編 集 後 記  
\*\*\*\*\*

第四号“偏向”するということ、言葉が足りなかつたかもしだれな  
い（文字化されない）叫びをこの書簡集はどうすべきなのか。言語  
のみに“偏向”してよいか。言語外の想いをなんとかパクリたい。  
それには、たとえ稚拙と思われるものであつてもそれを採る方が好  
ましいのでは？

又、前述のこととに加えて、この書簡集にのせる手紙は編集子だけ  
で判断している。その基準は、といわれても当惑する。ことばで尽  
くせぬ味があるのだから。読書にはイマジナシオンによつて味を捉  
えてもらうほかない。そしてこのことが偏向になるかもしれないの  
だが。

今まで不幸なことに選ぶという行為はなかつた。我々の手に入  
れる絶対量が少なく、その全部を掲載してきたようなものだから。  
獄中の、シャバの読者の反応を期待する。

＊ 火・夜・里・子さんが云うように、私達は何故斗うのか、理論として  
「理解」できても斗えない人間をどうしたらアシリ倒すことがで  
き斗へとそのエネルギーを、その内の炎を外へと向けることが  
できるのかという私達の根源的な、非常に困難な作業をこの小さ  
なパンフを通してやりきれば？！

そういう意味で、単なるレトリックとしてのことばではなく、  
それを発する主体自身のものとなり、血肉化されたことば▽

非常に易しいことはで語られてよいし、それを読むすべての人が  
話者と共にできる空間を抱けるようなことば▽を私は欲する。

「書簡集」の社会的効果は遅々たるものであろうし、それでよ  
いのだ。私は私達と共に感する人達を序々に増せねば？！それをつ  
くづく感じる。

＊ 五・一九以来、日共・民青の陰さんな個人テロルが文化人類・  
人文系斗争委をはじめとする全共斗の多くの学友になされ、我々  
のメンバー二人もテロルとリンクにあい、そのことを含めた理由  
により若干発行予定日が狂つたことをご承諾いただきたい。

我々は日共・民青のテロルとリンクには数倍の怒りと警戒心を  
もつてのぞむであろう。

（真崎・影丸）

